

僕はアラフォー独身のキモオタ男だ。

趣味と言えばアニメと漫画、エロ同人誌くらいで、当然だが彼女は二度も出来た事が無く、いまだに童貞だ。

そんな僕だが、一応は大学を出ており、教員免許を持っているが、

新卒で就職した学校の激務に耐えきれず、辞めてしまった。

それ以降は仕事もせず引きこもりのニート生活を満喫していたのだが、ついに親に勘当されてしまった。そんなタイミングで斡旋された非常勤講師の職に、仕方なく飛びついたというわけだ。

【僕】「お、おはようっ…」

【生徒】「…。おはようございます」

朝から大勢の若い生徒達とあいさつを交わすが、生徒達の反応は冷たい。

生徒達の間で僕の評判がすこぶる悪い事は知っている。

引きこもり生活が長くコミュ障かつ、授業も大して分かりやすく無い。

その上、不摂生を重ねた結果の醜い外見と来れば、評判も悪くなるというものだ。

正直、もうやめたい。

そもそも、なんで僕のようなキモオタヒキニートに、こんな立派な学校の仕事が斡旋されたのか。そんな事を考えていた時だった。僕の後ろから可愛らしい少女の声が聞こえて来た。

【姫花】「あら、おはようございます、先生♪」

その声を聞いた途端に発生した、キリキリとした胃の痛みを耐えながら、振り返った。

僕が振り返ると、艶やかな黒髪をたたえた美少女が、妖艶な笑みを浮かべて僕を眺めていた。この美少女は桜宮姫花と言い、この学校は桜宮学園の理事長の孫にあたる少女だ。彼女の祖父は、この地域を牛耳る巨大企業グループの会長であり、この地域の学校も会社も、そして政治や警察さえも、何もかもがそのグループの言いなりになっている。そして彼女の祖父は彼女をとっても可愛がっており、実質的にこの学園は、彼女が牛耳っていると言っても過言では無かった。



【僕】「お、おはようっ…桜宮君…」

【姫花】「クスククス…今日も相変わらずだしらない見た目ですね。」

そんな醜い外見でよく生きていけますね。その強さに心から尊敬しますわ」

顔を見るなり辛らつな言葉を投げつけて来る。周囲の生徒達は僕を見てあざ笑う。

そう、僕がこの学園に非常勤講師として入れたのは、彼女が僕を玩具にするためだったのだ。

そう思わずにはいられないくらい、彼女は僕に執拗にからんで、嫌がらせをして来た。

しかし、それが分かっているだけでも、誰も何も出来ないのだ。それほど彼女の権力は強大だった。

【僕】「今日も疲れたなあ……」

桜宮姫花の暴言や嫌がらせ、他の生徒達からの冷たい目線に耐えながら、僕は今日1日の仕事を終えて、何故か放課後に桜宮の教室の清掃までやらされている。本当なら生徒が清掃すべき所なのだが、桜宮に押し付けられてしまったのだ。

【僕】「くそっ……あのガキ……大人をバカにしやがって……」

何がよく生きていけますね、だ……！ 舐めやがって……！

僕は桜宮にやられた嫌がらせの数々を思い出しながら、悪態をつきながら掃除をした。朝の暴言程度なら可愛いもので、生徒達の前でわざを恥をかかせるように間違いを指摘したり、校長や教頭にある事ない事告げ回したり、授業で必要な物を隠して授業を妨害したり。そりゃ確かに、僕もずっと引きニートで色々至らない所はあると思う。それにしても、こんな年になってもイジメにあうなんて、正直理不尽にもほどがある。

【僕】「あのメスガキ、たまたま見た目と家に恵まれただけのクソガキめ……」

権力に守られてなかつたら、徹底的にレイプして辱めてやるのに……！

そんな悪態をついた時だった。僕の背後から不意に声がかかったのだ。

【姫花】「……へえ？ 貴方ごときが、この私をレイプして辱めるんですか？」

俺は全身から血の気が引いた。俺は恐る恐る、声の方向を振り向いた。

【僕】「あっ……あっ……さ、桜宮……君……い、いつからそこ……？」

【姫花】「グスグスグス……先生の独り言が始まったあたりからずっとです♪

それはそうと、この私をレイプして辱めるんでしたっけ？

私、そういうの嫌いじゃないですよ♡ ほら、どうぞご自由♡」

桜宮はそう呟き、その場で下着を脱いだ。僕はぐりと生唾を飲んだ。



【姫花】「グスグスグス……ほらほら、パンツも脱いであげましたよ♡

それとも童貞の先生は、目の前の女の子を犯す度胸も無いんですか？」

【僕】「ア、どう……！ わ、わからせてやる……！」

僕は目の前で挑発的な恰好をする美少女の誘惑に耐えきれず、ズボンを下ろし勃起ペニスを露出させた。そして桜宮を押し倒そうとした瞬間、俺の体は二回転して地面に叩きつけられたのだった。

「僕」 「ぶげえっ……!? がはっ……!」

いつの間にか、僕は数名の男子柔道部の生徒達によって取り押さえられていた。

「姫花」 「グスグスグス……貴方みたいなキモオタが、本気で私と出来るなんて思ったの?」

「貴方にもそろそろ飽きたから、社会から退場してもらおうね!」

「僕」 「えっ……な、なんでっ……!?!」

僕はどうやら、彼女の玩具として、

最後のお遊びに付き合わされたらしい。

今までの嫌がらせで退職をした教師達とは違い、

僕を性犯罪者として逮捕させ、刑務所にぶち込むつもりなのだど、僕は悟った。

そうやって人の人生を台無しにする事を楽しんでいるのだ。僕は心底腹を立てていた。

こいつに復讐したい。徹底的に辱めてやりたい。こいつこそ社会から退場させてやりたい。

僕は桜宮を睨みつけながら、柔道部員の締め技によって意識を暗転させられたのだった。



そしてしばらくして、僕は意識を取り戻した。ガンガンと痛む頭を押さえつつ、僕は何があったのかを思い出していく。そうだ、僕は桜宮に八メられ、柔道部員に締め落とされたのだ。という事は、この部屋は留置場なのだろうか？

【僕】「…いや、留置場というよりは。」

これは女の子の部屋じゃないか…？  
って、なんだこの甲高い声？ は？」

自分の声がおかしい。妙に甲高い甘ったるい声だ。

締め落とされて喉がいかれてしまったのだろうか？

ふかふかのベッドから起き上がると、自分が裸である事に気が付く。

というか、女の裸…？ おっぱいがあつて、チンポが無い…？

いやこれ、どうなっているんだ？？ 俺の体に一体何が起きたんだ？

俺は手探りでスイッチを探し、部屋の明かりをつけた。



【僕】「えっ！？　こ、これっ…桜宮姫花じゃないかっ！？　な、なんで…！？」  
部屋の灯りをつけると、部屋の鏡にはあの桜宮姫花の姿が映し出されていた。

どんな理由かは分からないが、僕は姫花の肉体になっているようだ。そうになると、僕の元の体はどうなっているのか？　僕がそう考えると、まるで動画を再生するように、学校での状況が姫花視点で脳内に再生されていく。

【僕】「柔道部員がやりすぎて、心肺停止になって救急搬送されたのか」

僕の本体は、桜宮グループの大病院に入院しているらしく、意識不明の重体らしい。流石に警察沙汰に出来る話ではないらしく、まだ僕は性犯罪者になっていないようだった。



それにしては、一体これはどういう状況なのか。僕は考える。

意識不明の肉体から僕の魂が抜けだし、  
姫花に憑依したと考えるのが自然だろう。  
しかし、それよりも今の僕が一番気になっているのは、  
目の前の鏡に映る裸の美少女の肉体であり、  
毛の生えていないオマシコの中身だ。

【僕】「はあっ……はあっ……♡」

僕はその場で足を開き、割れ目を広げる。  
くすぐったい感覚と共に肉が開き、  
ピンク色の豆や穴、膜が露になった。  
生まれて初めて見る生の女体とオマシコ。  
僕はゆっくりと指を伸ばし、その全てを丁寧になぞっていく。





《びくっ！ そくそくそくっ！》

【僕】「ひっ！ 敏感すぎっ！ あっ♡」

軽く触れるだけで体が仰け反ってしまう。  
男のチンポとは比較にならない感度。  
俺は声を押し殺しながら、指を動かしていく。

《にちゃっ…ぬちゅっ…》

次第にオマンコは愛液に濡れ始め、  
指は卑猥な音を立てながら、滑らかにオマンコを這い回って、  
耐えがたい強烈な快楽が下腹部に与えられていく。

ダメだ、気持ちよすぎる。耐えられない。我慢できない。

僕はゾクゾクと駆け上がってくる快楽に身をゆだね、指を必死に動かしていく。



【僕】「あひっ♡ ああああっっっ♡♡♡」

《ふちゅっ…ぶしゃあっ…》

僕は体をのけぞらせ、ビクンビクンと痙攣させ、おしっこを派手に漏らしながら、女体の絶頂へと達した。

【僕】「…あっ♡ おしっこ止まらないっ…♡  
が、我慢できないっ…あああっっ♡」

絶頂による快楽で腰はビクンと跳ね上がる。

快楽に支配された体が言う事を聞いてくれない。

女の体のオナニーが、そして絶頂がこんなに気持ちいいとは。

皮肉にも、あまりに強烈すぎる快楽によって、この肉体が夢ではなく

まぎれもない現実である事を、僕は思い知らされていた。



【僕】「はあっ…♡ はあっ…♡ や、やっと収まって来たかな…♡」

時間を忘れてオナニーしていたが、絶頂の余韻と興奮がようやくよく冷めて来た。

少し冷静になった所で僕は考える。

僕が姫花の肉体に憑依している原因も、

いつまでこの肉体なのかもわからないが、

やるべき事、というよりやりたい事は沢山ありそうだ。

僕の体に戻った時のために色々な手配をする事。そして…。

【僕】「…でも、流石に疲れたかな…今日はもう寝よう…」

しかし、慣れない肉体で狂ったようにオナニーしたため、疲れが限界だった。

いつまでこの肉体でいられるかわからないが、僕はベッドにもぐりこんだ。



そして翌朝。僕が目を覚ますと、まだ姫花の肉体のままだった。姫花の朝のルーティーンを思い出しつつ、シャワーを浴び、食事を済ませる。女子として、姫花としての行動や記憶を、必要に応じて思い出せるのはありがたい。それにしても、○学生で○5歳のくせに、発育の良い肉体をしていると改めて実感する。しかも学校でもトップの美少女だ。これで権力まで持っているんだから、そりゃ天狗にもなるだろう。



【僕】「さて、まずは自分の本体の確認と事後処理だな！」

僕は制服に着替えながら、姫宮家の運転手へ通話し、病院に連れていくよう指示を出す。制服に身を包んでいくと、鏡にはいつも通りの、憎たらしい美少女の姿が映し出される。こいつのせいで、僕は性犯罪の濡れ衣を着せられかけた上、心肺停止状態になったのだ…。それを思うと、僕の中にドス黒い感情が芽生えてくる。

鏡の中の美少女に酷い事をしたという欲望に駆られてしまう。

そこで僕は…身に着けていたパンツを脱ぎ捨て、ノーパンの状態で、制服を着用してやった。

当然だが、僕としては初めてのセーラー服姿で、しかも短いスカートの上にノーパンだ。割れ目とお尻に直接あたる風に、まるで裸で外出しているかのようでドキドキしてしまう。そんな興奮を味わいつつ黒塗りの高級車に乗り込み、そして病院へとやって来た。僕が病院に入るなり、当直の看護師が大慌てで院長に連絡し、僕はこの病院の院長の所へと案内された。



【院長】 「なるほど…。昨日救急搬送された教師に、最高の医療環境を与える事、ですか」

【僕】 「ええ、そうです。今回、先生を慕う柔道部員がじゃれついた事は不幸な事故でしたが、本来は生徒想いの良い教師なのです。私としても穏便に事を済ませたいと考えています」

【院長】 「わかりました。そのように手配いたしましょう」

こんなメスガキの一言で大病院の院長が動くとは、こいつの権力は一体どうなっているんだ。爺さんは孫を甘やかせすぎだ。しかし、今はその権力が心強い。

そして僕は、院長の案内で病室へと移動し、僕の本体と対面する事となった。

【院長】「こちらが昨日救急搬送された患者です」

案内された病室のベッドには、人工呼吸器をはじめとする様々なチューブに繋がれた、今の肉体とは対照的なほどに、醜く肥え太った僕の本体が横たわっていた。僕の本体は心現在意識不明であり、いつ目を覚ますか分からないそうだった。

【僕】「これが…今の僕の…」

僕は自分の本体へと手を伸ばすと、意識が本体へ引つ張り込まれるような感覚を覚えた。この感覚から察するに、僕の肉体に触れる事で、魂が僕の本体に戻り、目を覚ますのだろうか。

【僕】「…それでは、くれぐれもよろしくお願いしますね、院長さん」

しかし、まだ戻るわけにはいかない。僕は院長に念を押して、再び車へと移動し、学校へと向かった。



【生徒】 「おはようございます姫花さん！」

【教師】 「桜宮さん、おはようございます」

学校に到着すると、僕の姿を見るなり、生徒も教師も元気な声で挨拶をする。昨日までの僕とは扱いが全然違う。正直、少し気分がいい。

【僕】 「グスグス…おはようございます。今日もよろしくね」

僕はいつも通りの姫花を演じつつ、優雅に笑みを浮かべつつ挨拶をする。

祖父の力によって、学校では校長をも超える権力を持っており、見た目もスタイルも良く、勉強もスポーツもトップレベルで、さらに人気もあるという、性格を除けば完璧な美少女だ。

こんな美少女が今の僕であり、そして僕はこんな美少女をいつでも酷い目に合わせる事が出来るのだ。もし僕が姫花の体でとんでもない変態行為をして、それが学校中に知れ渡ったとしたら…。

僕はソクソクとした嗜虐的な興奮を胸に秘めつつも、平静を装いながら退屈な授業をクリアしていった。



そして6時間目の授業を終えた所で、教室の清掃の時間になった。

いつもなら僕の本体が掃除を押し付けられて、姫花もクラスメイトも何もしてないのだが、僕の本体が入院中である以上、姫花を除く他の生徒達が掃除をする羽目になっていた。

【男子】 「うたく、あのキモデブが入院したせいで、余計な仕事が増えちまったよ」

【男子】 「あ、桜宮さんはここで座って待っていていいからね」

僕は男子に促されるまま、一脚だけ残された椅子に座り、清掃の様子をボーッと見ていた。しかし、何故か男子達は僕の方ばかりをちらちらと見ており、清掃に身が入らないらしい。

【僕】 「ん？ どうかしたの？ 私の顔に何かついてる？」

もしかして僕が姫花でない事がバレたのか？ 恐る恐る僕が尋ねると、男子は言いづらそうに口を開いた。





「男子」 「えっと…スカートの中が見えてて…その…下着が…」  
「僕」 「スカートの中？ 下着…？ あっ…！」

そうだ、そういえば僕はノーパンの状態で学校に来ていたのだ。すっかり忘れていた。僕が男子をにらみつけると、男子は一瞬目をそらすすが、すぐに視線は僕のスカートの中へと注がれる。こんな美少女がノーパンで割れ目を丸出しにしているのだ、無理もない。



「僕」 「グスクスクス…。女子の割れ目を見たくらいで、何キモい反応してるの？」  
それとも、私の性器は醜くて、見るに堪えないとでも言いたいのかしら？」  
「男子」 「えっ！？ 醜いなんてそんな事！ と、とても綺麗ですっ！」

男子は挙動不審になりながら、前かがみになり勃起をごまかしながら、必死に答えていた。その必死さが見てみて滑稽だ。興奮した僕は、さらに男子をからかってやる事にした。

【僕】「グスグス…。そんなに見たいなら、もっとハッキリ見せてあげる♡」

【男子】「えっ…？ あっ…!」

僕が床に座り足を広げ、オマンコを左右に広げると、生徒達の視線がオマンコへと集中した。

【女子】「ひ、姫花ちゃん…!？ 何やって…!」

【僕】「グスグス…。何って、男子達に性教育を施してるだけじゃない。何か文句でもあるのかしら？」

【女子】「い、いえ…そういう訳では…」

僕は睨みを効かせて女子を黙らせる。

男子は食い入るように僕のオマンコを見つめていた。

《ニチャアツ…くばあつ…》

【男子】「ご、これが女子のおまんこ…」

【女子】「ひ、姫花さんの…うわっ…すま…」

男子は勃起を隠す事も忘れ、僕のおまんこに視線を集中させ、女子は恥じらいながらも、僕のおまんこを見つめていた。

流石は性欲と好奇心旺盛な〇学生だ。

しかし、こんな感じにじっくり見つめられていると、

僕も興奮を抑えきれなくなってしまう。

本能的にセックスしたくなってしまっている。

しかし、クラスメイトとセックスするなんて、

そんな普通の処女喪失など、こいつには相応しくない。

一生モノのトラウマになるようなえげつない方法でなければ。

そんな事を考えていた時、トイレ掃除担当の生徒が教室へと戻って来たのだった。



【男子】「ふう、やっと終わったわ……って、姫花さん何やって……？」

トイレ掃除担当の男子は、入ってくるなり、僕の姿を見て硬直していた。あの桜宮姫花がオマンコを広げて見せつけているのだ、無理もない。しかし、僕の目にはそんな男子よりも、男子が手に持っている半透明のゴミ袋の中身の方が気になっていた。

【僕】「私の事はどうでもいいわ。それより、

そのゴミ袋の中身は何なのかしら？」

【男子】「これ……？ ウンチが詰まっていた便器を

掃除してきたトイレブラシだよ……。

あまりに汚いから捨てようと思って……」

この女が処女を捧げるに相応しい相手が見つかった。僕は男子を呼び寄せ、その中身を取り出させた。